

課題番号: 1-2

研究課題名: 薬物使用障害に対する多様な治療法の開発

主任研究者: 松本俊彦 (NCNP 精神保健研究所薬物依存研究部部長)

分担研究者: 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 船田大輔, 村上真紀, 宇佐美貴士, 今村扶美, 森田三佳子

1. 研究目的

本研究班の目的は、すでに我々が開発した薬物依存症集団療法 (SMARPP) ではカバーできない様々な問題——すなわち、併存精神障害や感染症、性差などの個別的要因、および、治療セッティングを含めた多様なニーズ——を抱える薬物使用障害患者に対する治療法を開発することである。

2. 研究方法

本研究班では、以下の7つの分担研究開発課題を設定し、個別的配慮を要する集団の臨床的特徴と治療上の配慮点を明らかにするとともに、SMARPPの代替となる治療プログラムの開発を進めている。

- 「HIV 感染症を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療・回復支援に関する研究」(分担: 嶋根卓也, 精神保健研究所薬物依存研究部)
- 「薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究」(分担: 近藤あゆみ 精神保健研究所薬物依存研究部)
- 「薬物使用障害に対する精神科救急病棟での短期治療プログラムの開発に関する研究」(分担: 船田大輔, 病院第2精神診療部)
- 「発達障害を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究」(分担: 村上真紀, 病院第1精神診療部)
- 「ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究」(分担: 宇佐見貴士, 病院第1精神診療部)

- 「薬物使用障害に対する個人心理療法の開発とその効果に関する研究」(分担: 今村扶美, 病院臨床心理部)
- 薬物使用障害に対する作業療法プログラムの開発と効果に関する研究」(分担: 森田三佳子, 病院精神リハビリテーション部)

3. 研究結果と考察

研究班2年目にあたる今年度、本研究班の活動を通じて、薬物使用障害患者には様々な個性を持つ臨床類型が存在することが確認された。

当院薬物依存症専門外来における治療関係を1年間継続する者の多くで薬物使用障害の重症度が改善することが示された一方で、従来の治療法では十分な効果が得られず、個性への配慮を要する集団が同定された。その1つが、精神障害併存症例である。本研究班では、統合失調症スペクトラム障害および他の精神障害群、双極性障害および関連障害群、解離症群/解離性障害群を併存する者では、既存の治療法では十分な治療効果が得られない可能性が示唆された(近藤分担班)。

また、薬物使用障害患者のなかには、評価尺度上および臨床診断上で発達障害の併存が疑われる者が一般人口に比べて顕著に高率であった。しかしその一方で、小児期逆境体験を持つ者も多く、発達障害の状態増を複雑に修飾している可能性が示唆された。その意味で、発達障害を併存する薬物使用障害患者もまた個別的な対応を要する1群であると考えられた(村上分担班)。

さらに、ベンゾジアゼピン受容体作動薬の使用障害症例は、従来の違法薬物の使用障害患者とは異なる臨床的特徴を持ち、治療目標についても、

断薬」ではなく「減薬」を治療のゴールとすることが多く、重篤な身体依存に対処するために、減薬にあたって入院治療を要する場合も多い。その意味で、この一群も個別的対応を要する集団といえる。今年度は、当院で治療を実施した67例の診療録を詳細に検討し、臨床類型の検討を実施した。

最後に、個別的対応を要する一群が、ジェンダーへの配慮を要する集団である。覚せい剤使用はしばしばHIV感染リスクを伴う危険な性的活動と関連するが、その関連の詳細には性差があることが明らかにされた。このような1群の薬物使用障害罹患者の支援にあたっては、ハームリダクションの理念にもとづく薬物政策を導入する必要があると考えられた(嶋根分担班)。

一方、本研究班では、既存の薬物依存症集団療法に代わる治療法として、精神科急性期病棟における短期入院治療プログラム(FARPP)(船田分担班)、集団作業療法プログラム(リアル生活プログラム)の開発も行っており、現在、順調に患者リクルートと介入が継続している。個人心理療法プログラムについては、院内の多部署・多職種が協働して評価・参加登録をするシステムを整備するとともに、既存の集団プログラムを援用するかたちで少数例を試行する段階にとどまった。

4. 結論

本研究班では、既存の集団療法では十分にカバーではない集団を同定し、その臨床的特徴を明らかにしつつある。また、これに併行して、既存治療の代替オプションとなりうる、いくつかの新しい治療法の開発・効果検証、あるいは実施体制の整備を進めている。

5. 研究発表

1) Ayumi Takano, Yuki Miyamoto, Tomohiro Shinozaki, Toshihiko Matsumoto, Norito Kawakami: Effect of a web-based relapse prevention program on abstinence among

Japanese drug users: A pilot randomized controlled trial. *Journal of Substance Abuse Treatment* 111: 37-46, 2020.

- 2) Toshihiko Matsumoto, Toshitaka Kawabata, Kyoji Okita, Yuko Tanibuchi, Daisuke Funada, Maki Murakami, Takashi Usami, Rie Yokoyama, Nobuya Naruse, Yuzo Aikawa, Aizo Furukawa, Chie Komatsuzaki, Nozomu Hashimoto, Osamu Fujita, Aiko Umemoto, Ariyuki Kagaya, Takuya Shimane: Risk factors for the onset of dependence and chronic psychosis due to cannabis use: Survey of patients with cannabis-related psychiatric disorders. *Neuropsychopharmacol Rep.* 2020; 00: 1-10.
<https://doi.org/10.1002/npr2.12133>
- 3) Inoura S, Shimane T, Kitagaki K, Wada K, Matsumoto T: Parental drinking according to parental composition and adolescent binge drinking: findings from a nationwide high school survey in Japan. *BMC Public Health.* 2020;20(1):1878.
<http://doi.org/10.1186/s12889-020-09969-8>.
- 4) Ayumi Kondo, Takuya Shimane, Masaru Takahashi, Yoshiko Takeshita, Michiko Kobayashi, Yuriko Takagishi, Soichiro Omiya, Youichi Takano, Mayuko Yamaki, Toshihiko Matsumoto: Gender Differences in Triggers of Stimulant Use Based on the National Survey of Prisoners in Japan. *Subst Use Misuse.* 2020 Oct 24;1-7. doi: 10.1080/10826084.2020.1833930
- 5) Masahiro Takeshima, Tempei Otsubo, Daisuke Funada, Maki Murakami, Takashi Usami, Yoshihiro Maeda, Taisuke Yamamoto, Toshihiko Matsumoto, Takuya Shimane, Yumi Aoki, Takeshi Otowa, Masayuki Tani,

- Gaku Yamanaka, Yojiro Sakai, Tomohiko Muraio, Ken Inada, Hiroki Yamada, Toshiaki Kikuchi, Tsukasa Sasaki, Norio Watanabe, Kazuo Mishima, Yoshikazu Takaesu: Does cognitive behavioral therapy for anxiety disorders assist the discontinuation of benzodiazepines among patients with anxiety disorders? A systematic review and meta-analysis. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2021 Jan 15. doi: 10.1111/pcn.13195. Online ahead of print.
- 6) Risa Yamada, Takuya Shimane, Ayumi Kondo, Masako Yonezawa, Toshihiko Matsumoto: The relationship between severity of drug problems and perceived interdependence of drug use and sexual intercourse among adult males in drug addiction rehabilitation centers in Japan. *Subst Abuse Treat Prev Policy*. 2021 Jan 7;16(1):5. doi: 10.1186/s13011-020-00339-6.
- 7) Takuya Shimane, Masaru Takahashi, Michiko Kobayashi, Yuriko Takagishi, Yoshiko Takeshita, Ayumi Kondo, Soichiro Omiya, Youichi Takano, Mayuko Yamaki, Toshihiko Matsumoto; A Nationwide, Cross-sectional Survey in Japan. *J Psychoactive Drugs*. 2021 May 12:1-9
- 8) 今井航平, 浅見隆康, 松本俊彦: 依存症家族支援プログラム GIFT の有効性に関する検討. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 54(6) : 247-259, 2020.
- 9) 宇佐美貴士, 松本俊彦: 10代における乱用薬物の変遷と薬物関連精神障害患者の臨床的特徴. *精神医学* 62(8) : 1139-1148, 2020.
- 10) 松本俊彦: 薬物依存症と孤立. *精神科治療学* 35(4) : 385-390, 2020.
- 11) 松本俊彦: ハームリダクションについて. *精神科治療学* 35(5) : 541-545, 2020.
- 12) 村上真紀, 松本俊彦: Self-harm in over8s : long-term management (NICE clinical guideline,CG133). *精神医学* 62(5) 増大号 : 775-778. 2020.
- 13) 松本俊彦, 今村扶美: 薬物依存症－認知行動療法の手法を活用した依存症集団療法「SMARPP」. *精神療法 増刊第7号* : 136-147, 2020.
- 14) 宇佐美貴士, 松本俊彦: 2. 物質関連障害および嗜癮性障害群 1)物質関連障害. *臨床精神医学* 49(8) : 1219-1226, 2020.
- 15) 松本俊彦: 行動嗜癮と物質依存症. *日本医師会雑誌* 149(6) : 10471-1044, 2020.
- 16) 松本俊彦: 依存症から物質使用障害・嗜癮性障害へ. *精神科治療学* 35(9) : 1005-1009, 2020.
- 17) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究－「声の架け橋」プロジェクト (Voice Bridge Projects). *刑法雑誌* 59(3) : 432-439, 2020.
- 18) 松本俊彦: 薬物使用者を支える地域づくり ハームリダクションに依拠した薬物使用者の支援. *公衆衛生* 84(12) : 801-806, 2020.
- 19) 沖田恭治, 松本俊彦: アディクションに関わる不安とその対応. *精神科治療学* 35(12) : 1349-1354, 2020.
6. 知的所有権の取得状況
なし
7. 自己評価
本研究班は、病院多職種も含めた「All NCNP」の分担構成とした分、研究に不慣れな者もあり、研究活動の進捗は遅れ気味ではあるが、本研究班に参画することで、病院の臨床活動は活性化し、提供する医療サービスの質は確実に上昇している。

HIV 感染症を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療・回復支援に関する研究

嶋根卓也 (国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所薬物依存研究部)

1. 研究目的

HIV 感染などの性感染症は、覚醒剤などの薬物使用に関連する予防可能な健康問題の一つである。しかし、日本国内の覚醒剤使用者における薬物使用と危険な性行動との関係は十分に研究されていない。そこで、覚醒剤使用と危険な性行動の間には性差があるという仮説を立て、全国の刑務所に新たに入所した覚醒剤事犯者を対象に覚醒剤使用と危険な性行動との関連を調べることを目的とした。

2. 研究方法

対象は、覚醒剤取締法違反で新たに刑務所に入所した薬物事犯者である。調査期間は 2017 年 7 月～11 月であり、全国 78 施設の刑務所 (医療刑務所を除く) に新たに入所した計 699 名の受刑者 (男性 462 名、女性 237 名) が対象であった。

次の 4 つの指標を用いて危険な性行動を評価した。これらの指標は相互に関連し、かつ等価であるという前提をおき、一般化推定方程式 (GEE) によるロジスティック回帰分析を行い、覚醒剤使用行動 (独立変数) との関係調べた。

1. コンドームを使わないセックス
2. 複数の性的パートナー
3. STD 診断歴
4. 売春歴

研究実施にあたっては、国立精神・神経

医療研究センター倫理委員会の承認を得た (A2017-107)。

3. 研究結果

危険な性行動の経験率は、コンドームを使わないセックス (男性 78.4%、女性 81.7%)、複数の性的パートナー (男性 61.3%、女性 41.3%)、STD 診断歴 (男性 14.1%、女性 23.6%)、売春歴 (男性 15.6%、女性 17.7%) であった。

ロジスティック回帰分析の結果、性交時の覚醒剤使用は、男性受刑者 (AOR= 5.86; 95%CI= 3.41-10.07)、女性受刑者 (AOR= 2.58; 95%CI= 1.33-5.00) の両方において、危険な性行動のリスクを有意に上昇させていた。また、女性受刑者においては、注射器の共有経験 (AOR=1.60; 95%CI= 1.06-2.42) も危険な性行動のリスクを有意に上昇させていた。

4. 考察

覚醒剤使用と危険な性行動との関連性には性差があることが示された。本研究の知見は、性差に着目しつつ、覚醒剤使用者に対する危険な性行動を軽減させるようなハームリダクションプログラムを日本の薬物政策に含めることの重要性を示唆している。

なお本研究は、Journal of Psychoactive Drugs にアクセプトされた。

Shimane T, et al. Gender differences in the relationship between methamphetamine use and high-risk sexual behavior among prisoners: A nationwide, cross-sectional survey in Japan. Journal of Psychoactive Drugs, 2021. (in press)

薬物使用障害の治療転帰に関する個別的要因の影響に関する研究

近藤あゆみ(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部)

1. 研究目的

薬物依存症専門外来を受診した薬物使用障害患者の治療転帰に影響を与える要因を明らかにし、将来的には治療反応性別の臨床類型とその対応ガイドラインの開発を目的とする研究を実施した。

2. 研究方法

2017年1月から2019年11月までの35ヶ月間にNCNP薬物依存症外来を受診した新規患者384名のうち、治療の継続と研究参加に対して自発的に同意した者は197名であった。そのうち、治療開始時と1年後の2時点における自記式問診票情報が得られた83名を分析対象とした。薬物依存重症度はAddiction Severity Indexの薬物使用領域のコンポジットスコア(以下、ASI薬物CS)により評価した。

3. 研究結果

対象者における治療開始時および1年後のASI薬物CS中央値はそれぞれ0.26(四分位範囲(以下、IQR):0.06-0.38)と0.13(IQR:0.06-0.24)であり、薬物依存重症度に有意な改善が認められた(Wilcoxon signed-rank sum test, $p<0.001$)。

対象者のうち重複障害を有する者の割合は56.6%であり、内訳が多かったのは、「抑うつ障害」19.3%、「統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群」9.6%、

「解離症群/解離性障害群」7.2%、「双極性障害および関連障害群」6.0%、「神経発達症群/神経発達障害群」6.0%などであった(重複あり)。

次に、対象者を「重複障害なし群」(36名)、「重複障害あり群(抑うつ障害のみ)」(14名)、「重複障害あり群(その他の4障害)」(19名)の3群に分類し、群ごとにASI薬物CSの前後比較を行った。「重複障害なし群」の治療開始時および1年後のASI薬物CS中央値はそれぞれ0.19(IQR:0.06-0.33)と0.11(IQR:0.06-0.20)であり、有意な改善の傾向が認められた(Wilcoxon signed-rank sum test, $p=0.072$)。また、「重複障害あり群(抑うつ障害のみ)」も、0.40(IQR:0.32-0.50)と0.14(IQR:0.06-0.29)で有意な改善が認められた(Wilcoxon signed-rank sum test, $p=0.002$)。一方、「重複障害あり群(その他の障害)」は、0.22(IQR:0.10-0.34)と0.20(IQR:0.06-0.36)であり改善が認められなかった(Wilcoxon signed-rank sum test, $p=0.776$)。

4. 考察

NCNP薬物依存症専門外来患者の薬物依存重症度を治療開始時と1年後の時点で前後比較したところ、有意な改善が認められた。しかし、「統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群」「解離症群/解離性障害群」、「双極性障害および関連障害群」「神経発達症群/神経発達障害群」(重複あり)の重複障害がある患者群においては、薬物依存重症度の改善が認められなかったことから、治療の困難さや効果的な治療のあり方についての情報を集積し、対応のガイドラインを示すことが求められる。

薬物使用障害に対する精神科救急病棟での短期治療プログラムの開発に関する研究

船田大輔 (国立精神・神経医療研究センター病院 第2精神診療部精神科医師)

1. 研究目的

依存症の臨床は減少の一途をたどり、アルコールを始めとする依存症診療は長期の入院を前提とし、近年の入院期間の短縮が求められる入院治療に現実が全くそぐわない。本分担研究は精神科救急病棟における物質使用障害患者に対し、FARPPを提供し、介入の効果を検証することを目的とした。FARPPは全4回から構成されるプログラムで、テキストを媒介として物質使用障害の問題について考えられるよう作成されたプログラムである。

2. 研究方法

2017年10月から2019年9月までの間に国立精神・神経医療研究センターの精神科救急病棟に入院した精神疾患の患者(20歳以上、精神疾患の治療を入院の理由とする患者)のうち、薬物やアルコールの使用が入院と関係していたと医師が判断した患者を対象に、入院期間中にFARPPへの参加を求め、同意した者を対象とした。

対象に対して、プログラム開始前(エントリー時)、入院中プログラム終了後もしくは退院前、退院後3か月、及び退院後6ヶ月後、12ヵ月後の5つの時点で評価を行った。評価項目は、診療時に実施した問診票の評価尺度得点、ならびに診療録に記載された治療継続状況に関する情報である。

そのうえで得られたデータを、FARPP参加群、FARPP非参加群、精神疾患群(薬物使用のない精神疾患患者)からなる3群に関して様々な比較・検討を行った。

3. 研究結果

FARPP参加群22名、FARPP非参加群8名、精神疾患群78名の患者のデータ収集を目指している。

今年度は、FARPP参加群、非参加群の1年後転帰調査を中心としたデータの収集を行った。参加群22名中17名(77.3%)が1年後通院していた。5名の内データ収集中1名、ダルク入所1名、刑務所入所1名、連絡不通1名だった。非参加群8名のうち5名(62.5%)が1年後通院していた。残りの3名中データ収集中が2名、ダルク入所1名だった。精神疾患群78名の1年後転帰調査を行った。57名が通院継続。残りの21名中、15名がデータ収集中、2名が通院を中断。4名が1年以内に死亡した。

4. 考察

COVID-19の影響もあり通院が滞る中でデータ収集に遅れが生じている。今年度中に1年後の転帰についてできる限りの方法を用いて、データを収集し、退院後の予後と治療継続状況への影響について検討する。

回復者支援施設に入所するケースで追跡困難例が見られた。その理由として、頻繁に施設を変わることも回復支援に必要とされる場合があり、転帰の追跡が困難だったことが上げられる。また刑務所に入所するケース、死亡したケースが散見された。

発達障害を伴う薬物使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究

村上真紀（国立精神・神経医療研究センター病院 精神科）

1. 研究目的

薬物依存症治療として認知行動療法による覚せい剤依存症治療プログラム（SMARPP）の普及均てん化が図られているが、患者の個別的要因を考慮した治療や支援の追加が必要である事が多く、発達障害傾向の有無は重要な要因と考えられる。そこで、本研究では、発達障害併存薬物使用障害患者の対応ガイドラインの開発に寄与することを最終的な目的とし、その準備段階として、まずは、薬物使用障害患者における発達障害傾向併存率と臨床的特徴、及び併存症例の治療転帰を明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

本研究の対象は、2020年4月から2021年3月までの間に当院薬物依存症センターを初診し薬物使用障害と診断された患者のうち、同意を得られた者である。

まず対象全例に対して、初診時点で自記式質問紙である、「AQ日本語版 自閉症スペクトラム指数 成人用 10項目版（AQ-J-10）」、および「成人期のADHD自己記入式症状チェックリスト（ASRS-v1.1）」を実施し、この2つのいずれかのカットオフ値を超えた者に対して、児童精神科医である分担研究者が面接を行い、発達障害の臨床診断に関する評価を行うとともに、初診6か月後の時点における臨床情報の収集を行う計画である。その際、収集される情報としては、「薬物使用頻度」、「被虐待経験の有無」「薬

物初使用や事例化するまでの経過」「治療継続性」「薬物療法の内容」などである。

2020年度は、本調査期間として対象患者の組み入れを行った。

3. 研究結果

2020年4月から2021年3月までの間の初診患者199名のうち、AQ-J-10またはASRS-v1.1いずれかのカットオフ値を超えていた者は51人（25.6%）で、このうち面接を経て、本研究対象者となったのは30人であった。AQ-J-10カットオフ値以上の者は12人（40.0%）、ASRS-v1.1カットオフ値以上の者は29人（96.7%）、その両方であったものは11人（36.7%）であった。また、子ども時代の逆境的体験スコア（以下、ACEスコア）が0点は5人（16.7%）、4点以上は7人（23.3%）であった。

4. 考察

対象者はADHD傾向の者の頻度が高く、ASD傾向の者の多くがADHD傾向を同時に認めていた。また、一般高校生の88.9%がACEスコア0点であり、4点以上は1%にとどまるという調査結果と比較すると、対象者は子ども時代に虐待を含む不適切な養育体験が深刻な例が多いことが示唆され、生来の特性をこれらの体験が修飾している可能性の検討が必要である。今後は、初診6か月後の臨床情報収集を行い、発達障害併存症例の臨床的特徴を検討する予定である。

ベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害の臨床的特徴と治療法に関する研究

宇佐美 貴士 (国立精神・神経医療研究センター病院 第1精神診療部 精神科医師)

【緒言】薬物使用障害の中でもベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害患者は近年増加傾向にある。他の使用障害とは異なりベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害の治療目的は必ずしも断薬ではなく、病状によっては少量のベンゾジアゼピン受容体作動薬を継続しなくてはならないが、治療法は定まっておらず減薬法も手探りの状態である。本研究では、これまでに当院薬物依存症専門外来へ受診した患者の診療録を参照し、臨床的特徴を明らかにしていく。

【方法】2015年4月から2019年12月までの間に、当院薬物依存症専門外来に受診しベンゾジアゼピン受容体作動薬使用障害と診断された患者を抽出し、診療録を参照し年齢や性別、併存障害の有無といった属性について類型化を行う。施行した減薬法と転帰を比較し減薬法について検討する。(承認番号 A2019-095)。

【結果】対象期間中に薬物依存症専門外来を受診した患者は563名であった。主たる薬物がベンゾジアゼピン受容体作動薬である患者は67名で、診療録を確認したところ使用障害と診断された者は42名であり、残りの25名は不安障害などの基礎疾患があり、その治療のためにベンゾジアゼピン受容体作動薬が必要である患者で、所謂使用障害ではない患者であった。使用障害と診断できた42名の内、耐性や離脱と

いった問題や薬物探索行動を有する依存症と判断できる症例が24名、挿話的な過量服薬が中心となる症例が18名であった。

【考察】67名の診療録を参照し診断についてまず類型化を行った。入院加療を行った患者が20名おり、今後減薬法について解析を行う。半年以上の通院があり経過を追うことができる患者が28名で、加療の転帰について解析を行う。

【結論】薬物依存症専門外来に受診した主たる薬物がベンゾジアゼピン受容体作動薬の患者の診断について類型化を開始した。今後の研究で臨床的特徴と減薬法、転帰について明らかにしていく。

【論文】

宇佐美貴士、松本俊彦：10代における乱用薬物の変遷と薬物関連精神障害患者の臨床的特徴. 精神医学 2020;62(8),1139-1148

【参考文献】全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査 平成30年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業：H29-医薬-一般-001) 分担研究報告書 研究分担者 松本俊彦

薬物使用障害に対する個人心理療法の開発とその効果に関する研究

今村扶美（国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部）

1. 研究目的

国立精神・神経医療研究センター（NCNP 病院）薬物依存症センターでは、薬物依存症に対する構造化された依存症集団療法（SMARPP）の開発・運営を行っている。この治療プログラムは、集団療法ならではの力動が治療的に作用する特徴がある一方で、集団場面の適応が難しく、診察や個人心理療法（個別 SMARPP）による対応となる患者が一定数認められる。本研究では、薬物依存症専門外来の中で SMARPP が適用された患者、されなかった患者の臨床的特徴を明らかにするとともに、個別 SMARPP の内容や効果について検証することを目的とする。

2. 研究方法

①2017 年 4 月～2021 年 6 月までに NCNP 病院薬物依存症センターの初診を受け、当院にて治療継続となった患者を SMARPP 適用群、診察のみの群、診察と個別 SMARPP 適用群の 3 群に分け、診療録をもとに属性および基礎的診療情報を収集して分析する。②2019 年 4 月～2021 年 6 月までに、個別 SMARPP が導入された患者について、内容や結果等について事例を整理する。

3. 研究結果

①については、現在症例を収集中であ

る。②については、2020 年度は、4 名の実施依頼を受け、2019 年度分と合わせて計 7 名となった。個別 SMARPP に紹介となった理由は、症状等により集団適応困難と判断された者が 5 名、プライバシー上の理由により個別対応となった者が 2 名であった。前者はいずれも 10 代～30 代前半の女性であり、使用薬物の多くは市販薬であった（市販薬 4 名、覚醒剤 1 名）。後者はいずれも 40 代から 50 代の男性であり、使用薬物は違法薬物であった（コカイン 1 名、大麻 1 名）。紹介された 7 名のうち、1 名については個別 SMARPP の導入には至らず、導入された 6 名中 3 名は治療終了、3 名は治療中断となった。

4. 考察

集団療法への適応が困難であり、個別的介入が必要と判断されたケースについては、若年の市販薬依存の女性が多いという特徴がうかがえる。また、複雑な背景、ニーズや症状の多様さなどが影響し、治療中断が生じやすいようである。こうした患者に対しては、従来の覚醒剤使用男性を主たるターゲットとして開発された依存症治療プログラムになじむことは難しいと思われる。また、個人心理療法の実施に際しても、内容や構造、目標設定等に関して高い柔軟性が求められることが推察される。

次年度は、個別 SMARPP の実施事例を引き続き蓄積するとともに、SMARPP が適用された群とされなかった患者について、その臨床的特徴を明らかにする予定である。

薬物使用障害に対する作業療法プログラムの開発と効果に関する研究

森田三佳子(国立精神・神経医療研究センター病院精神リハビリテーション部)

1. 研究目的

薬物使用障害患者への治療においては既存の集団プログラム(SAMRPP)があるが、多様なニーズに対応できるような種々のプログラム開発も望まれている。

そこで本研究では、身近な作業活動(身体的活動、余暇活動、調理等の生活活動)に実際に取り組み、相互交流や役割をもたらし作業療法プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした。

2. 方法

本研究の対象は、2018年8月から2020年7月までの間に、依存症回復支援プログラム(作業療法プログラム・SMARPP)に参加した外来患者である。

作業療法プログラムに参加する患者の臨床的特徴をSMARRP参加者と比較分析するためにプログラムの出席状況を確認し、①「作業療法プログラム」コア参加群 ②「SMARRP」コア参加群 ③「両プログラム」参加群に分け、記述統計にて分析することとした。また、作業療法プログラムに参加している対象者(①③)については、より詳細な量的・質的分析を行い、参加者のニーズや生活の困難さ・プログラムの効果について検討していく。

研究実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た(A2020-087)。

3. 研究結果

2018年8月から2020年7月の期間において、作業療法プログラムの延べ参加者数は44名で、そのうち1クール30%以上の参加率の者は30名であった。SMARPPの延べ参加者数は136名で、そのうち1クール30%以上の参加率の者は42名であった。計72名の対象者を3群に分けたところ、①「作業療法プログラム」コア参加群は21名、②「SMARRP」コア参加群は33名、③「両プログラム」参加群は9名であった。

統計解析は、「性別」「使用している主な薬物」「重複障害の有無」「学歴」「居住形態」「就労状況」等を3群間で比較するために χ^2 検定を実施した。また、年齢については一元配置分散分析を実施した。その結果、「性別」「重複障害の有無」「使用している主な薬物」「就労状況」は3群間において有意差が認められた。

作業療法プログラム参加者のニーズや生活の困難さ、プログラムの効果については、今後得られたデータをカテゴリー化し、ICF項目との関連を検討していく予定である。

4. 考察

作業療法プログラムに参加している対象者はSMARPP参加者に比べて、女性の割合が多く、重複障害があり、依存している主な薬物としては覚せい剤以外の割合も多くみられた。学歴に有意差はみられなかったが、作業療法プログラム参加者は、SMARPP参加者のように仕事という社会生活との接点を保ちながらプログラムに参加している者は極めて少なかった。

今後はより詳細な分析を進め、対象者の生活課題やニーズに合ったより効果的な作業療法プログラムへと発展させていく必要がある。

1-2

A study on development of tailor-made treatment programs for drug use disorder

Principle researcher: Toshihiko Matsumoto, M.D., Ph.D.

Department of Drug Dependence Research, National Institute of Mental Health,
Nation Center of Neurology and Psychiatry

Many of the patients with drug use disorder have various psychosocial, medical, psychiatric, and gender problems other than drug-related disorders. Therefore, the “tailor-made” treatment programs for them considering individuality and caseness of each patient are required. However, such treatment programs have never existed in Japan, while the structured group therapy program, the “SMARPP” (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program), which we had developed and spread nationwide for treating the patients with drug use disorder, have existed as only one authorized and formulated program in Japan.

The purpose of our study is the following three points; first, to identify the clinical subgroups who need to be not intervened and treated in a group but individually, second, to examine clinical feature of such subgroups, and lastly, to develop the alternative, tailor-made treatment program. In order to achieve the first and second purposes, we set four studies on the clinical courses and treatment prognosis of patient with drug use disorder (divisional researcher, Kondo A), the relationships of drug abuse with risky sexual behaviors, and HIV infection (divisional researcher, Shimane

T), the relationships with developmental disorder including autistic spectrum disorder and attention-deficit / hyperactive disorder (divisional researcher, Murakami M), clinical features of patients with abusing prescribed and OTC drugs (divisional researcher, Usami T). Further, in order to achieve the third purpose, we set three studies; the studies on development of alternative treatment programs for drug use disorder, such as an individual psychotherapy (divisional researcher, Imamura F), a brief intervention program for inpatients (divisional researcher, Funada D), and an occupational group therapy (divisional researcher, Morita M).

In the second annual year of our projects, we have obtained several findings on associations of clinical courses and drug-using pattern with psychiatric comorbidities and gender differences. We have also started to evaluate efficacies of the brief inpatient-program and occupational group therapy.

The next annual year, the final year of our project, we planned to develop the “tailor-made” individual psychotherapy, and to examine the relationships with developmental disorder, and clinical features and treatment tactics of patients with abusing prescribed drugs.